

第二章 三花のむかし

第一節 古代の生活を遺跡に見る

日田盆地は湖だった、という伝説がある。

江戸時代中期ごろの日田の歴史書『豊西記』ほうさいきという書物によると、

その昔、四方を山々に囲まれて、蓮の葉のような形に窪んだ湖があった。

人の気配もないこの湖に、ある時東の方から大鷹が翔んで来た。

上空に悠々と輪を描いていたが、急に舞い下って、湖水に羽を浸して羽ばたいたかと思うと、北天に向かって、消えて行った。

すると忽ち湖は鳴動して、水が煮え立ったように渦巻

き、大波が起こり、水煙りが立って、空も暗いほどになった。

この時西南の山が大地響きとともに裂け崩れて、満々と湛えられていた湖水は、どつと一気に溢れ出、奔流となって流れ去った。あとには広びろとした平地と、そこを貫く一筋の河と、三つの岡が姿を現わした、という。

盆地を見下ろす周縁の小高い場所の、あちらこちらに、舟繋ぎ石とよばれる岩が、建っている。日田が湖だった頃の、名残りだといわれる。財津の竜体山や伏木峠にもそういう石がある。

口碑伝説としては、雄大でもっともらしいが、日田盆地が湖だったことを、学問的に実証するものは、まだ発見されていない。

では昔むかしの日田は、どんな姿だったのだろうか。

総体としては、現在の形とそんなに違っていないかったろう、と思われる。山やまは四囲から迫り、平地には、びっしりと葦のようなものが、生い茂っていた。その中を幾つかの河川が、貫流していた。

いま市内の平地を掘ってみると、ほとんどのところで、こどもの頭くらいの高さの河原の玉石が、ごろごろと

埋まっているのが見つかる。かつての日田を流れる大小の河は、絶えず氾濫を繰り返し、そのたびに流れの筋を変え、盆地を縦横に走っていただろう。そこは人びとの住むのを許さなかった。

私たちの先祖は、周縁の小高い丘や山の水の便のよい場所を選んで、住居を構えて、生活を営んでいた。結婚し、子どもを育て、家族を構成し、集落を形成した。そういう場合は、いま残された文物や発掘調査によって、確かめられている。

日田は丘陵の到るところに、古代の人びとの痕跡が認められるが、なかでも三芳地区求来里・刃連地域、五和地区石井地域、光岡地区吹上・友田地域、朝日地区小迫地域、有田地区西部などの台地が、主要な箇所である。

三花では、現在までに発見されているのは、次の場所である。

一 弥生時代

日田は縄文時代までの遺跡はごく稀で、日田の歴史の曙は、ほとんど弥生後期の時代にある。

三花も同じ状況である。

(1) 用松原（山田原）遺跡

天神町熊取から羽野、用松を通過して朝日地区山田へと



慶徳の畑にある石片

続き、一方千倉から小野地区陣ヶ窪へ抜がる、広大な台地には、古代遺跡が点々と見られる。

既に大規模な開拓と耕地整理が入っているために、詳細な把握をすることは、もはや難しくなっているが、土器などの出土遺物によって、ある程度の推定はできる。

羽野原の東縁、字慶徳のあたりの畑の傍に偏平な石の板が転がっている。

石板の面にはかすかながら赤い色、朱を塗った跡が認められる。同じような石片を、庭の敷石などに使っている家も、この近所にはあるそうだが、

石片は弥生時代の墓に使われた石棺の材であることは、疑いを容れない。



羽野原台地

埋蔵の状態がわからないから、どんな副葬品があったのかは、不明である。

しかしこの周辺には土器の破片が多数落ちている。

大部分は灰色の須恵器片で、弥生より後の時期のものであるが、これらの土器は埋葬の時の墓前祭に供した祭具として、用いられたのであろうから、恐らく相当数の石棺が、埋葬されていただろうと、想像される。この土器片は開拓にあたって、各所から掘り出され、まとめて捨てられたものである。

ほかに注目されるのは大きな石包丁の発見である。

「文化」の項で述べるが、石包丁は弥生の頃から始まる、耕作の道具の一種で、山田原出土とわかっているだけで、場所を特定することができ

ないけれども、この台地のあたりでは、既に耕作が行われていたと考えられる。

ただ、これだけの周辺文化がありながら、住居跡が発見されていない。いずれ近くにあったものと思うが、農地開拓によって、地表が削られてしまつて、わからなくなっているのは、残念である。

(2) 鍬ノ本遺跡

鎌倉末期の『百練抄』^{ひやくれんしやう}という書に、

津江山の住人が、鍬ノ本の畠の中から、銅銚を二本掘り出した。

ということが記されている。

銅銚は弥生時代の典型的な祭祀用具で、現に五和の石井神社と大山町の老松神社に、所蔵されているものがそれに当る、とされている。

この鍬ノ本というのは、清水町住吉の地とする説がある。

銚が出土しただけで、そこで祭祀が行われたということには、必ずしもならない。



鍬ノ本の遺跡のあと

いし、クワノモトとよばれる地は、ほかにも各所にあって、ここが、『百練抄』にいう地と断定するのは、確実でない。

しかし西有田の坂本遺跡とも、隣接しており、徳川初期から中期の、墓石も残っていて、何かの古代遺跡だったとしても、おかしくはない。

二 古墳時代

(1) 羽野横穴墓

昭和五九年夏、天神町羽野、字城の脇にある横穴墓の一部が、発掘調査された。

確認された一基の横穴墓のうち、もつとも古いものは、五世紀後半で、大分県内でも初期に属するとされ、以後八世紀までの間に造られた、墓群である。

勾玉・小玉などの玉類、耳環^{みみわ}、さまざまな土器のほか人骨も発見されている。

この調査は急傾斜地防災工事に伴って、行われたのであるが、幸いに横穴墓は、出来る限り現状保存されており、なお未調査のも残されているので、さきの石棺墓とは違い、今後とも注目される遺跡である。

(2) 用松古墳

清水町用松の、首なし地蔵の伝説で知られる堂の南の、台地東端部、字の名も小塚というところに、かなり大きい丸塚がある。

全く調査を実施していないので、内容についてはまだ



羽野横穴墓群近景



用松原の古墳

判っていないが、七世紀頃の古墳と思われる。

このような円墳を築くことができたのは、それだけの力を持った部族の首長がおった、ということである。

おそらくはかつては、墳丘もこの一基に止まらなかったかもしれない。

住居群のあった可能性は、いっそう高いことになる。

(3) 迫横穴墓

用松原の北奥清水町^{さき}迫の三和牧場の傾斜地に、横穴墓が発見された。

道路を作るために横穴の前半部は削り取られて、残った部分が農具小屋の代りに使用されていたが、昭和五五年に、整理をしていたら、鉄剣が二口と刀子^{とうす}が出土した。刀子は幅のせまいナイフである。

牧場主の話では、道路工事のときに、土師器^{はじき}（赤色の土器）が壊れて出ており、穴の天井には、朱が塗ってあったようだ。玉類もあったに違いないが、既に不明である。また他にも横穴墓が、あったのではないかと思われるが、これもまた発見されていない。

鉄剣と刀子について、なお「文化」の項で述べる。



山田原迫の横穴墓

(4) 未確認の遺跡

地区の人々の話題に上ったり、遺物や云い伝えがあっても、既に、遺跡は消滅し、写真・記録なども残されていないために、所在や状況を、確認することができないものを挙げる。

小塚古墳 伏木町にかつて丸塚があつて、小塚という地名まであるくらい、場所の特定もできるようであるが、消滅していて、円墳であつたことを、実証する方法がない。

しかし地域の状況としては、古墳があつてもよい場所である。

藤山石棺墓 藤山町の花月川左岸山中に、石棺片が見つかったことがあるという。そのほかのことは、いっさいわからないが、多数ではないだろう。

住吉遺跡 市内の某氏のところに、三花の採石場から拾つて来たという、小型の提瓶ていべいがある。

ただ採石場というだけでどこなのかわからないし、某氏自身で採取したものではないので、どこか他の場所から運ばれて来たかもしれない可能性もある。

だから住吉という地名を冠せるのは正確ではないが、

ニツカウイスキー工場敷地の調査で、竪穴式住居跡が発見されたことから見て、このあたりに遺跡があったことは、充分に考えられるので、しばらくこのままにしておく。

この提瓶については、「文化」の項で再述する。

千倉遺跡 天神町千倉ダム入

工池の周縁、とくに東北と北縁付近から、土器片が採取されている。あるいは遺跡ではなく、人が移動するときの、キャンプ地のようなポイントだったのかもしれない。

比丘^{びく}尼塚古墳 羽野原から千

倉へ通る道の途中、畑の中に、道路に面して、直径・高さとも三メートルばかりの塚があつて、比丘^{びく}尼塚と云っていた。

円墳だったことに、疑いの余地は無いだろうが、原の開拓にあつて、崩されてしまった。どん



遺跡のあった千倉

な古墳だったか、今となつては確かめることができないが、既に盗掘があつたのか、崩すときにも何も出土しなかった、とのこと、未確認古墳ということにしておく。

しかし用松原あたりにあつた古墳は、現存の前記用松古墳だけではなかったことは、確認してよいと思う。

竜体山遺跡 竜体山の西

斜面に、土器片を発見した記録があるが、それ以外のことは全く不明。これもキャンプ地かもしれないが、竜体山は、小規模な遺跡があつてもよいところである。

近年清水町笹森神社の裏から出たという須恵器（灰色の土器）も、右と同様の性格のものだろう。

これらの遺跡のほかにも、いろいろの場所で、数片の土器のかげらなどを、拾うこと

があり得るだろう。それがひよつとしたら、新たな遺跡の発見へ、繋がることになるかもしれないのである。

三 歴史時代

第一章で述べたように、古墳時代後期頃から、倭国は大和政権の下で、統一国家としての体制を、整備して行く。

そのことが私たち三花地区に、どんな姿をもたらしたかを、いまに振り返って見ることができるだろうか。

(1) 条里跡

大宝元年（七〇二）リツリョウ律令の施行によって、班田収授法に基づく口分田が、各戸に支給された。

このためには、戸籍と耕地の整備が行われなければなら

なかったが、豊後日田の地に、いつごろ実施されたかは、明らかでない。正倉院に、当時の課税台帳にあたる天平九年（七三七）の「豊後国正税帳」という記録がある。これには日田郡の部分を欠いているが、日田郡司の名は記されており、その頃までには、耕地整備も終了していたのだろう。

耕地整備の結果は、田を縦横の線で区切った条里に見られ、日田でも条里跡と思われる箇所が指摘されている。

三花地区では、花月川兩岸の地に、残存するといふ。

済生会病院建設地も、その推定地内に包含されていたので、昭和五九年、その一部が試掘された。

多くの川原石といくらかの土器片のほかには、



済生会病院敷地の発掘調査

とくに糸里跡を証するものは出ていない。

花月川の氾濫の事実と、糸里が実際にあったのなら、その頃には人びとは、台地を降りて、平地に居を構えていただろう、と想定される。

(2) 郡街跡

大字三和のうち、現に天神町内の字名に、当根町、郡町、迫町、経田、七枝などというところがある。

九州を代表する考古学者の一人、福岡大学教授・小田富士雄氏によると、これらは役所に附属する官人たちの住居地帯を意味する刀根町、雑戸町、公的な田を意味する郷田、などと通ずる名称で、それぞれ、一郡の最も中心的な場所を示すもの、と考えられるという。

すなわち、これらの字を結んだ地域は、日田郡の中心地であって、郡の役所である郡衝が置かれていたのだらう、との説を『九州天領の研究』の中で述べておられる。

三花地区にとって、この節はたいへんおもしろく、興味をひかれる。

とくに、近年小迫辻原に、豪族居館跡を始めとする、弥生から近世までに到る、大規模な遺跡が、発見されているから、それから遠くない地に、郡衝が置かれていた

としても、考えられないことではない。

ただ、やはりそのことを裏づける物証は、全く発見されていないし、このあたりの土地の、当時の、状況もわからないので、場所を推定することも不可能である。いづれにしろ、郡衝跡と断定するには、地名だけでは不十分であり、まだ慎重に検討していく必要がある。

四 古代の三花

これまで述べたところをまとめて、三花を眺めてみると、どんなふうに見えてくるだろうか。

今から二千年くらい以前までは、現在の三花の地域に、定着して住居を構える人びとは、ほとんどなかった。

どこから来たのかはわからないが、確実に人が住んだといえるようになるのは、五世紀になってからである。

その人びとは、盆地の北部に臨む、台地の南端に、集落を営み、死者を、崖の中腹に横穴を穿って、葬った。あまり遠くないところに、耕作も行つて、石包丁などの道具を使って、収穫をしていた。

彼らは六世紀、七世紀、八世紀と、続いてその地に住み、

隣接の草場や辻原や吹上の住民たち、あるいは遠く三芳、石井の台地の人びと、物々交換で交遊し、時には勢力を争って闘っただろう。またある時は、一致して、大和政権や他の地方から来た勢力と戦って、日田を守ろうとしただろう。

生産力の飛躍的な増加、生活の安定などに伴って、台地を降りて来た彼らは、地区に点在する、小さな勢力を統合しながら、自分たち自身も、やがてより大きな勢力の下に、組み入れられて行く。

五 大蔵氏の抬頭

このような道筋を辿りながら、その過程で、どんな政治形態がとられていたのかは、現在のところほとんど明らかになっていない。

日田に関する歴史書には、邑阿自むらあじ、久津媛ひさつひめ、中井王なかいのみみ、早部為行、同妙高の子、鳥羽宿禰とばのすくねなどの人物名が、開拓者、統治者として登場してくるが、これらはまた、伝説と史実の間を漂っており、ぼんやりとした影を、見せているにすぎない。

前にふれた「豊後国正税帳」には、日田郡司として、日下部連吉嶋かべのむらじま、日下部君大國くさかべのみみおおくにらの名が、挙げられているから、實在の人物であることは、確かであるが、事蹟はまったくわからない。

しかしこの記録によれば、この頃までに日田地方は、おそらく中央からの官人の流れと思われる、日下部という一族によって、統合されていたのだろう。

同時に、日田地方も、大和朝廷という大きな体制の中に、組織化されていた。

やがて日下部に代わって、起こって来たのが大蔵氏である。

大蔵一族がどんな氏族であったのか、いくつかの説があつて、いずれも明らかな証拠はないが、やはり日田以外の地から、入って来たことは、間違いない。

或は、宇佐から八幡神を氏神として奉じて、来たのではないか、と思われるふしもある。

その祖を大蔵永弘という。

永弘はまだ半ば伝説に包まれているが、その後代、大蔵永季に至ると、平安時代の貴族の筆記『中右記』『相撲日記』などにも、相撲節会すまいのせちえの取り手として、はつきり

と記されている。すなわち、相撲の神様、日田どんと称される人物である。

大蔵氏は永弘の代に、日下部氏を日田の中央から追い



馬絵宮八幡原の大の日田どん

放って、勢力を獲得し、郡司職に就任。その子孫が、中央の貴族とも接触して、奉仕しながら、代々郡司となつて、日田地方を支配していた。

大蔵氏の居館は、永興寺のあつた慈眼

山付近に置かれていた、といわれているが、小迫辻原の豪族居館跡や、さきに述べた郡術跡がほんとうにそうであるならば、これも大蔵氏の館跡としての関係が、考え

られるところである。

平安末期頃から、地方へ下った官人たちは、その土地に根を張って私領化し、権益を守るために、武力を蓄え、やがて武士団を形成していった。大蔵氏も例外ではなく、日田の実質的な領主化を遂げていく。

もちろん夜開郷^{やけこう}の一部であつた三花地区も、大蔵氏支配下に組み入れられて、半農半武の生活が行われていった。他の地区と同じように、特に変わった動きが知られているわけではない。

三花地区が、歴史の展開の中で目立った姿を見せるのは、次の時代、中世後半に、大蔵氏から分かれた財津氏が、登場するようになってからである。

第二節 中世は武士の活躍

一 中世三花の記録

平安時代から鎌倉、南北朝、室町の各時代を経て、戦国乱世の終息に至る、長い中世時代の日田の歴史、とくにその後期は、現在のところ、ほとんど三和財津氏の動きを中心として、記述されている、といってよいくらいである。

現在残されている中世日田の記録は、『豊後日田郡司職次第』と『財津氏系図』という二種類が、主要なものであって、その後書かれた日田の歴史書が、大部分これによりながら、ほかの若干の資料を援用している状態だから、である。

「財津氏系図」は、竜川寺および藤山村庄屋家に伝わる財津文書に、また江戸時代始めに日田を出た熊本財津氏の当主家そのほか諸家に、それぞれ保存されているが、内容はいずれも大同小異である。これらを校合、集大成

した「財津家譜」が、昭和一五年に刊行されている。

これらは、三花の歴史ともっとも深い関係にあることは、いうまでもなく、こういう記録が残っていることは、私たちの地区にとって俾せなばかりか、日田史の視点からも、たいへん貴重である、といえる。

この郷土三花のむかしも、もちろんこれに従い、なおまた熊本財津家に伝わる史料を基に書かれた、『日田記』という書物にも拠って、記述をすすめることとする。

二 三花武士団、財津氏の起り

長い中世の期間、日田地方は、郡司である大蔵氏代々の支配するところだった。

中でも、事蹟の傑出した人物の一人として、岳林寺を創建した大蔵永貞ながさだが、挙げられる。

永貞は京都で没し、後を甥の大蔵永敏ながとしが継いだ。その子が大蔵氷息なぐさである。

応永四年（一三九七）六月、周防の大内義弘が軍を起こして、日田に攻め来たった。日田勢は奮戦空しく、敗れて、大いに家勢を減じた。そして、筑前江辻の戦いで、

永息は弟氷友とともに敗死した。この時、永息の子、次郎氷清は、わずか二歳だった。

大蔵の家は傍系の氷純が継ぎ、永清はこれに養育された。

永清は、成長の後も郡司家を継がず、応永一九年（二四一二）日田の北方の守りとして、財津に居住し、藤山に砦を構えて、財津氏を名乗った。財津氏の祖である。

鎌倉時代には、全国の武士団は、幕府の統制の下におかれるようになった。各国に守護を置き、各地には地頭を任命して、組織的支配を行なった。

諸国の武士は、地頭、守護を通じて幕府につながり、紛争、戦乱が絶えないようになると、次第に有力守護大名の家人となつて、所領の保証を得るかわりに、いざという時には、その手に属して、命を投げ出して戦闘に加わった。一所懸命ということばは、これである。

その頃、日田は郡司大蔵氏の支配下にあった。各地方には、おそらく部下を派遣して、実務に当らせていたのだろう。

しかし、統治形態が複雑になり、戦乱も続くことになると、統治を能率的、効果的に行うため、また他国他郡

からの侵入を防ぐためにも。各地方に強力な軍団を配置する必要がある。それには、一族の者を分駐させるこ



羽野台地 竹藪の手前付近が羽野城の跡

とが、もつとも当を得ているだろう。

こうして、この頃、財津氏と前後しながら、たぶん高瀬氏、堤氏あたりをはじめとして、氏の創設が行われることになる。

財津氷清の次男永豊は、羽野に城を構えて、羽野氏をとнаえ、そ

32



の子永道は坂本氏となった。そのほか財津氏からは、江島、用松、日出、檜原、さらに羽田財津、秋原財津、隈財津などの諸氏が、分かれていった。大蔵分流からは石松、瀬戸口などの諸氏が出た。

財津家の当主は、一族郎党とともに、平生は農耕を主体にして、牛馬を飼ひ、狩・魚獵を生業としながら、武器の手入れなどしていた。

そして、いったん戦さが始まれば、割当ての人数を引き連れて、財津党として、さらに大蔵家当主に従って、日田党として戦場に赴いた。

豊後では、大友氏の家人として、各所の戦いに参加する武士団の中に、大蔵または日田の家名があり、またその手の家の子として、前に述べた諸氏の名が挙がっている。

この人々が、平和な時にどのような方をしていたか、ほとんど記録に現われて来ないが、華ばなしい戦闘の様子は、一族の名譽として、何よりも恩賞の対象となる功績の証拠として、数々の文書に残されている。

三 大友氏の支配と八大郡老

さきに郡司職を継いだ大蔵永純は、文安元年（一四四四）正月に死去。嗣子永包が年少なのに乗じて、弟永好は家督を奪おうとした。

日田の諸将は、これを討ったが、永包もまた、永好の家臣今村左馬に殺され、大蔵日田氏は滅亡した。

諸将は相謀って、大友永世を迎えて、永包の姉に配し、日田家を継がせた。大友日田氏の始まりである。

日田はこうして完全に大友の配下に置かれることになったが、統治には日田独自の裁量が、まだ許されていたようである。

太永七年（一五二七）七月、大友日田氏の第七代、日田親将は、かねて寵臣平嶋図書の特横を許したため、諸將の恨みを買ひ、大友義鑑の命をうけた諸將に攻められ、逃亡した。日田郡司職はこれを最期とし、大蔵から大友へと続いた日田氏も、歴史の表面から消滅することになった。

このうち、大友義鑑は、日田郡の、物に慣れ声望もあ

る将士八名を選んで、合議して日田の統治にあたらせた。
日田の八大郡老という。すなわち

坂本伯審守鑑次 号随応

財津長門守鑑氷 号芳澤

羽野遠江守鑑房

石松肥前守廉正

堤 越前守鑑知（後、彈正少輔）

高瀬山城守鑑俊

佐藤出雲守永信（目代）

世戸口大和守永益（目代）

ここでも大友氏は、日田を直接に統治することなく、
地域の独自性を考慮して、委せる方策をとったものであ
る。

四 財津一統の奮戦

財津一族の勇敢な戦いぶりの記録には、多少の手前味
噌の気味もあるのだろうか、以下、年代を追って拾って
いくことにしたい。

人名がいくつも出て来るが、一人ひとりの関係を記す

のも、かえって煩わしく、読みにくいだろうから、別掲
の略系図を、参照していただきたい。

さて、外からの敵に対しては、一致団結して戦った日
田党の諸将も、たがいに確執を生じ、また主の日田氏、
大友氏の命によつては、相争うことも多かったようであ
る。

高瀬山城守鑑俊は、かねてから武勇をたのんで、傍若
無人の振舞が多かったので、諸将との反目が続いていた。

日田親将の追放にも、鑑俊は同心せず、かえって親将
に味方するような様子があったので、諸将は大友義鑑に
告げて、これを攻め、討ち取った。

大友氏は勢力を拡大しようとして、北部九州へも度た
び出兵した。その通路にあたる日田は、或は戦場となり、
筑前・筑後と対峙して、当然諸将も参陣しなければなら
なかった。

財津一族もまた、各地の戦いに勇猛ぶりを発揮し、数
かずの感状を賜わっている。

享禄元年（一五二八）財津治部少輔永胤、筑後甲石に
於て秋月種実の軍と力戦。

天文一九年（一五五〇）財津和泉守永邦、筑後秋月の

古処城を攻める。

弘治二年（一五五六）財津永邦、肥後に出陣する。

永禄八年（一五六五）

立花鑑載が大友を背いて、周防毛利に味方の様子を示したので、大友義鎮（宗麟）自から出馬して、筑前立花城を囲んだ。財津尾張守永忠らの日田勢は、第三陣に加わって攻撃、鑑載はついに敗れて自害した。永忠らはさらに進んで、毛利の軍と戦った。

元龜元年（一五七〇）

八月、財津永忠、大友の肥前竜造寺攻めに従陣、戦ったが敗れる。

天正元年（一五七三）

日田郡の国見、烏宿、高



財津氏が居た藤山城跡

井、亀石、針目山の五城を、修復し、防備を固めた。亀

石城を財津伯誓守永亮、針目山城を財津主殿助永名が預

かる。

同年、秋月の将木村源太が針目山城を窺うとあって、永名の子角右衛門永晶は、木村の鳶山城を攻めて、これを討ち取る。

天正二年（一五七四）筑後の問註所鑑則は大友に従っていたが、秋月に降って兵を進め、日田高井城に押し寄せた。城代堤平右衛門は狼煙を揚げて大事を知らせるとともに、奮戦防禦につとめたが、ついに敗れて討死した。

敵軍は勢いにのって石井に攻め入ったが、財津永忠らの日田勢が援軍に馳せつけ、これを日田の外に逐い返した。

天正四年（一五七六）彦山の僧徒が秋月に心を合わせて、大友に背いたので、宗麟は兵を発し、四月三日その軍は日田に着陣した。城尾城の財津讃岐守鎮

則、同久右衛門永尚を先鋒として、八日彦山に攻め上った。この地に詳しい鎮則の家臣十五郎の手引によって、寺に火をかけ攻めたので、山は陥った。永尚は落ちる僧徒を見逃してやり、その仁心が人びとを感じ入らせた、という。

天正五年（一五七七）一二月、問註所鑑則が日田へ押寄せるとのこと、財津加賀守永三、同永尚らは、筑後甲石に出陣、これと対戦して、破った。敵を追って筑後浮羽に入り、大石丹後守の居城を攻めて、これを討ち取った。

天正七年（一五七九）五月、大友の命によって、日田の軍が筑前長尾城を攻めたが、勝敗つかず、引き揚げる。天正八年（一五八〇）大友の家人田北大和守紹鉄は、田原紹忍の讒言ごんごんによって、主人宗麟の勘氣を受けた。攻撃の難を避けて、西に走り、日田郡五馬庄松原へ至った。

この知らせを受取った財津・坂本ら日田の諸将は、直ちに馳せ向かった。

四月一三日、財津永三、同善内兵衛永秋、同永尚ら同勢は、田北一行に襲いかかった。田北も防戦につとめる。激しい闘いの中で、永秋は矢を射かけられたが怯まず、

奮戦。しかしついに、負傷のために落命した。二八才だった。一方、紹鉄も自ら得物をとって戦い、永尚が馬上で組み合い、どうと落馬したところを、その首級を挙げた。時に永尚二六才、一一個所の傷を負いながらの力戦だった。

大友宗麟は感状と褒賞の土地、刀、馬などを与えて、これをねぎらっている。

現在大山町、松原ダムを見下す丘に、田北塔といわれる石塔が、建っている。

天正九年（一五八一）彦山が再び異心を挟むに及んで、一〇月八日、大友宗麟は自ら軍を率いて、日田に出陣した。これが高瀬の陣ヶ原である。財津鎮則らの日田勢は、先鋒として攻撃に加わり、僧徒を追いつ落して、凱陣した。天正一〇年（一五八二）正月、財津永晶らの日田の諸勢が、筑前小石原で秋月方の軍と戦い、夜に入ってこれを敗走させる。同国穂波に於ても度たびの合戦。

同年七月、大友軍の筑後長瀬城攻略に、財津鎮則、同永高らは、甲石口へ向かって戦う。

天正一二年（一五八四）大友宗麟は、次男親家を日田に遣わして、秋月方の黒木実久の籠る筑後猫尾城を攻略

させた。財津鎮則、同永高、永尚、何右衛門永継ら財津党は、先鋒に加わって、城を押し囲んでいた。

七月二一日、寄手は一斉に城に取りついて、攻めたてた。永尚は力戦の末、討死。弟永継が兄の遺屍を護って、敵を防ぎながら引き揚げるところへ、父鎮則も駈け付けて、陣頭に立って永継を助けた。城兵も城内に引き揚げ、固く扉を閉ざして、立て籠もった。

八月二一日、秋月軍が来援。ここで城の内外からの攻撃に堪えられず、大友方は敗亡した。財津鎮則も乱戦の中で討死、永継は最も難しい殿^{しんが}りを受持つて、退^{しりぞ}いた。この時一九才、その豪胆を褒めぬ者はなかった。

財津永忠は永継の働きを賞して、養子に迎え、財津城を譲った。鎮則の後は、永高が継いだ。

天正一三年（一五八五）一月、大友の軍、筑後国境の針目城を攻略。日田諸将士も参陣した。

天正一四年（一五八六）大友の下知に従って、坂本道烈を将とする日田・玖珠諸勢が、筑前長尾城へ押し寄せた。

天正一五年（一五八七）五月、宗麟大友義鎮が、島津との戦いで敗戦の混乱の中、病歿した。

豊後の英傑の終わりとともに、中世という社会も終わりに近づき、戦いの日々も、やがて最後の無益な火花を散らして、終わろうとしていた。

さて、財津家は、このような数かずの戦闘への参陣の中で、大友氏から多くの感状を与えられている。その例を挙げてみよう。大山町松原での田北紹鉄追討に際しての、宗麟とその子義統が発給した二通である。たいへん丁寧な書き方になっている。

一通は原文のまま、一通は読み下し文で示す。

今度田北大和入道成敗之儀申付候於阿曾野表討果当郡五馬庄迄落行候処最前懸合紹鉄討留分捕高名之次第寔無比類候殊別而依碎手十一ヶ所被刀疵鐺疵親子兄弟同前拙忠儀粉骨之趣感悦無極候何様忠実不可有余儀之条如此之刻者弥馳走之心懸肝要候

卯月廿三日 円齐（朱印）

財津久右衛門尉殿

この度、田北大和入道不義顕然に依り誅伐の儀下知

加え候処、程なく落失のとき、当郡井手口松原村に於て討ち果し候砌、紹鉄事、その方分捕り高名、殊に十一ヶ所刀疵を被るの由、忠義比類なく誠に感悦極まりなく候。その賞として豊筑の間に於て三十町分坪付は別紙にありの事預け遣わし候。知行有るべく候。仍て太刀一振、刀一腰、腹巻一領糸毛、甲一刎同毛、馬一疋遣わし候。志を顕すばかりに候。なお称名寺演説あるべく候。恐々謹言。

卯月廿六日 義統（花押）

財津久右衛門尉殿

こういう感状の類は家の功績や名譽を表わすものであり、ことに後者のように褒賞の内容まで明記したものは、相続などの場合所領の重要な証拠となるので、大切に保存し伝えられた。

五 財津永満、鑑水の事蹟

ここで、少し遡って、中世財津一族の中で最も知られている、財津長門守永満の事蹟について、まとめておこ

う。

財津長門守永満は永胤の弟で、城尾城主。性質は温厚だったが、武芸にすぐれ、特に馬上での弓が、非常に巧みだったという。

ある時、讒言する者があって、大友義鑑の勘気をこうむることがあった。

天文元年（一五三二）、大友は堤弾正少輔鑑智と高瀬越後守永実に対して、財津を討つように命じた。

堤は高瀬と語らって、千倉の後にある手城が嶽の麓に陣取って、西と北から一挙に財津に襲いかかろうと、手筈を整え、時至るのを待ち構えていた。

ところが、大風雨が起こって、川が溢れ、高瀬軍は動けなくなってしまった。

待てども現われぬ高瀬軍に、もはやこれまでと起とうとした堤軍の眼の前に、様子を察して機先を制した財津軍が、どつとばかりに押し寄せて来た。

堤鑑智も直ちに迎え撃って、壮絶な戦いが繰り広げられたが、不意を突かれた堤軍に利あらず、ついに破れ去った。

討死した鑑智主徒七人を、葬ったところを陣ヶ窪とい



塚七人窪ヶ陣

い、いま、七人塚という石の供養碑を、その墓だといいい伝えてる。

一方高瀬永実
は、その怠慢を
大友に責められ、
早速に財津を討
つよう催促され
るので、永満の
油断を見すまし、
不意をうって襲
撃を加え、城に

そのうちに、この地の寺に霊仏があつて、たいへん靈験があらたかである、と聞いて、永満は厚くこれを信仰し、帰参の祈願を籠めた。

やがて天文三年、大友の赦免の知らせが届いた。

永満は喜んで、かの御仏の御加護と、この仏像を奉じて、三田尻の港から、帰国の途についた。

本領財津に復帰した永満は、一寺を建立し、龍林寺と称して、この仏像を安置した。いまま地元の人びとの尊崇をあつめる、薬師如来がこれである。

薬師如来像そのものについては、「文化」の項で、あらためて述べるが、この戦国の世の武士たちの、精神のあり様を示す、一つの例である。

天正七年（一五七九）財津永忠が、廃絶されていた禅寺を整備し、浄土宗の寺として再興。筑後善導寺から方蓮社圓誉上人を迎えて、松雲山竜川寺として、財津氏の菩提寺に定めた。

このこともまた、心の安住を求めた、武士の熱い想いだったのだろう。

さて、筑前の秋月種実が大友との盟約に反して、島津と通じたが、日田の武下中務少輔も秋月と内縁があつて、

火をかけた。

財津軍は防戦につとめたけれども、力及ばず、永満の弟で、羽田財津五人の一人、財津永庸も戦死、一族は皆再挙を誓って、散りぢりとなった。

財津永満は僅かな供廻りを引き連れて、周防山口に逃れ、ひそかに、無実の晴れる日を待っていた。



財津長門守永満の供養墓

親密な関係を結んでいた。

このため、大友義鑑は不審を抱いて、財津長門守鑑永に、武下を討つことを命じた。

武下中務少輔は、実は鑑永の女婿だったが、大友はこのことを計算に入れての、下知だったのだろう。

鑑永は内心苦しんだろうが、主命もだし難い。謀り事

をめぐらして、討つことにして、早速、連歌の会と称して武下を招いた。

武下が翌朝早く、少しばかりの家臣を供にやって来るところを、伏せておいた五〇人の兵が、押っ取り囲んで、討ち果たした。

武下の弟民部大輔は、ようよう逃げ戻った下人の知らせで、直ちに城の扉を閉じ、寄せ手の攻撃を迎えた。しかし寄せ手は大勢、ついに衆寡敵せず、武下一門悉く討死。

末弟の僧栄徳は岳林寺に在ったが、兄たちの大事と、弓矢を執って駆けつけようとしたところに、従兄弟の坂本得法に阻まれ、一騎打ちとなって、互いに差し違えて落命した。

財津永満と鑑永について、右のような事蹟が伝えられているのであるが、両者の間に多少の混乱がある。

永満が、大友義鑑の詔の一字「鑑」を賜わり、両人も長門守に任じられているところを見ると、永満と鑑永の区別は多少あいまいで、或は同一人物ではないかという感じもする。

しかし、明白な断定の根拠もないので、しばらく、両者を父子とする財津氏系図に従っておく。



吹上台地の裏 武下氏の城跡があった。

第三節 近世への橋渡し

一 新しい時代への動き

天正一〇年（一五八二）六月、織田信長が明智光秀に謀反され、本能寺で自害した。

天下は、いち速くその仇を討った羽柴秀吉の手に、握られていった。

豊後では、大友宗麟が島津に追い立てられて、止むなく秀吉に仲介を頼み、その麾下に入らざるを得なくなっていた。

もう地方どうしの云わば勝手な争いごとが、許される時代ではなく、秩序が求められていた。

天正一七年（一五八九）一〇月、日田郡の検地が行なわれ、それに基いて、土地が配分され、領地が定められた。この時の検地は、畑は三反を以て田一反に換算したので、三段引の法といった。

当時、三花にはどんな人びとがいたのか、どれだけの

領地を所有していたのか、『豊西記』から書き抜いてみる。
すべて前述の換算によって、田の面積としている。

四六町三反畝	羽野新助
八町六反三畝	羽野理右衛門尉
四町三反四畝	羽野弾助
三町一反七畝	羽野左京亮
一町八反四畝	羽野祭主允
一〇二町九反七畝一五歩	財津大学允(永高)
三一町三反一畝九歩	財津又太郎
六町二反六畝	財津三七郎
七町六反	財津六郎
七町八反九畝二〇歩	財津伝右衛門尉
一二町	財津孫三郎
七町四反二一歩	財津主税入道
七町二反八畝二五歩	財津角(寛)右衛門尉
四町二反三畝二一歩	財津主殿助
同	財津帯刀亮
五町一反八畝	財津平右衛門尉
三町八反八畝	財津助左衛門尉

九反 財津七右衛門尉
三町八反 奈良原孫十郎

と、拳がつている。

その頃、財津永高が一統の中心にあり、周りを家の子、郎党が固めていた様子が想像できる。

今日の田畑の状況を単純にあてはめることはできないが、この所領からおおよそどの程度の規模の家のくらしだったかが、考えられよう。

六町八反 浄土寺

とあるのは、竜川寺を指すものと考えられている。

日田郡総面積は、一四九八町八反二畝一四歩
としている。

天正一九年(一五九二)八月、豊臣秀吉は豊後国に対して、検地を命じた。大友の書上では、米で算えた日田郡の石高は、

二二、四二五石五斗四升

となっている。

領地や支配地、または支給される俸禄の高を示すのに、米の石建てを用いるのは、江戸時代を通じて、ずっと行

われる。

二 大友氏の衰亡と日田の変化

大友氏は宗麟・義鎮の死後、義統よしむねが継いだ^{ついで}が、父に比べて覇氣に乏しかったようだ。

しかし、どんなに覇氣満々であつても、それがそのまま生き方となる時代でも、すでに、なかった。

天正一九年、秀吉は朝鮮出兵を決めて、各武將に渡海を命じた。翌二〇年(文禄元年)四月、大友義統も出陣した。

財津大学助永高は、これに従った。永高の従士江島伝之允が虎狩りをした、などのこともあつたという。『日田記』の註によると、永高のほか財津姓の従軍者の名に、九左衛門、平左衛門、作之進、孫三郎、与五郎、橘右衛門、助左衛門、覚右衛門、千松、七右衛門尉と挙がつている。また戦死者に、財津又太郎とある。

前項の所領表にもある名前が、いくつか見える。

文禄二年(一五九三)春、義統は鳳山の城を守つてしたが、黒田長政の軍議の招きに応じて、その白川城に赴いた。その後、小西行長が戦に敗れて退いて来た。行長

は鳳山城に入ろうとしたが、義統の家臣たちは、敵の大軍の追走を案じて、高所からの攻撃のため、山に構えをとり、城は無人となつていた。行長はこれを秀吉に訴えたため、義統は城を空けたことを責められ、領国豊前豊後一円を召し上げられ、自身は毛利家に預けられた。

鎌倉時代初めの
大友能直から
続いた名家、一時
は、九州北部四か
国の守護と、九州
探題を兼ねて、全
盛を誇つた大友
家も、ここで滅亡
した。

豊後一国は、数



日隈城のあった亀山

万石以下の小さい領地に分断して、大名を配置された。

主家と領地を同時に失った、大友家臣の一同は、流亡を余儀なくされた。

日田では、郡老制は廃されたが、大名領とはならず、秀吉の直轄地、すなわち太閤蔵入地とされた。

同年、秀吉の命によって、豊後国検地が実施された。いわゆる太閤検地である。

検地奉行に、鳥取城主宮部善祥坊法印が任せられ、宮部は豊後高田に下向、日田郡へは名代として宮部伝右衛門吉数を派遣して、検地を行わせた。

これに基づいて、翌文禄三年（一五九四）、豊臣の家臣宮木長次郎が代官となって日田へ入り、日隈山に城を築いて居城とした。

慶長元年（一五九六）日田は毛利伊勢守高政に与えられて、大名領となった。高政は朝鮮に出陣し、日隈城に代官を置いた。

慶長三年（一五九八）、毛利高政、佐伯に転封。日田は依然毛利領で、城番毛利隼人佐が在城する。

三 時勢の転回、財津氏の動き

織田、豊臣、徳川と移る、あわただしい時局の中で、日田もまた、私料、天領と変転を繰り返していくことになるが、武将たち、財津一統は、どんな動きを示したのだろうか。

慶長三年、豊臣秀吉が死去。

慶長五年（一六〇〇）関ヶ原に東西対決の天下決戦。

中国の毛利方にあった大友義統は、好機逸すべからずと、豊後に帰って挙兵した。中津城主黒田如水は、石



月隈城址に残る石垣

垣原の合戦にこれを破り、なお日田を手中におさめるため、家臣栗山備後守利安を向かわせた。

日隈城番毛利隼人佐は、主高政が東軍に心を寄せていたので、栗山の談判を受けると、異義なく城を渡して退いたので、栗山は事なく入城した。

この時、城内には日田の武士たちが入っていた。財津永継、同四郎右衛門永重も、一族を率いて城を固めていたが、城明け渡しとなって、財津に引き揚げた。

その間に永継、永重は、栗山利安と親交を結んだ、ということである。

完全に政権を握った徳川家康は、大名の再配置を行ったが、毛利伊勢守高政は佐伯に留まり、日田もその支配に入っていた。

慶長六年（一六〇二）小川壱岐守光氏が、日田の北半部を領して、月隈山に城を築いて丸山城と称した。天守の石垣が後代の補修を経て、現在も残っている。三花地区は小川領に属していた。

このち日田は大名領、幕府領大名預り地、同直轄領代官支配地、また大名領と、目まぐるしく変転する。その間の経緯は『日田市史』等にくわしく述べてあるので

省略するが、天領として代官支配が定着するのは、貞享三年（一六八六）以降である。

四 武士の意地―彦山騒動

慶長一六年（一六一一）説では一八年ともいう、一月五日のこと。財津永継の子、正作永広とその弟の藤兵衛永次は、神事の見物として、供を揃えて、彦山に登った。

翌一六日、兄弟は雑踏する祭の群衆の中に、かつての下人で、年貢の金を盗んで出奔した男を見つけた。直ちにこれを捕え、旅宿に連れて来て厳しくいましめ、彦山座主の許にこのことを報告した。

その夜半になって、田川の総庄屋弓削田新右衛門から、自分の支配地内の者だから、返してくれるように、と申入れがあった。永広が答えて云うよう、これは罪人だから返すことはできないが、事情があるのならば、相談に応じましょう、と。

一七日早朝、またも弓削田から、どうしても返してくれないなら、総庄屋が自ら出向いて返させる——と云って来た。

彦山神社の銅鳥居



永広は、おもしろい、おれの目の黒いうちは、どうして返そうか、と答える。

そこで弓削田は、弟の津野村九郎右衛門とともに、多勢を引き連れて、兄弟の宿所に押し寄せ、その供の家人二名を、鉄砲で打ち殺した。

兄弟も馬で駆け出して、馬上鉄砲で、弓削田を仕とめてしまった。

九郎右衛門も、鉄砲で永次に向かったが、やはり永次に打ち殺された。

事は、もはや容易には収まらない。

財津方は旅宿内にこもり、田川方はこれを取り巻いて、互いに鉄砲を打ち合い、双方死者や手負いが出る。田川方の死者は七人と述べている。

教学坊、学林坊という山伏が、間に入って仲裁したので、やっと鉄砲だけは控えた。

そのうちに、日田にもこのことが聞こえて、財津永重、弥太郎統周、九郎左衛門永近、弥左衛門永直、七左衛門永哲など、血気の財津勢八〇人足らずが、駆け登って来て加わった。

旅宿をめぐって土塁を設け、備えを固めて、意気盛んなどころを見せつけた。

一方、細川藩でも士卒を遣わして旅宿を囲み、田川郡奉行・益田蔵人が、永広ひとりと談合したい、と申し入れたが、その手に乗る者たちではない。

困った細川藩では、重臣加賀山隼人正が、数年以前か

ら細川に仕えていた、財津惣左衛門永高を呼び出し、同族のことだから、無事に片をつけてくるように、命じた。永高は益田郡奉行ほか一名を、差し添えにして、永高らの旅宿に向かい、両刀を捨て、丸腰になって、中に入った。

永高が言葉を尽くして、説得したので、ようやく、永高ひとり小倉へ同行することを承諾した。一族のおもだった者も、成行きを案じて、ひそかに後に従った。

小倉では、藩主細川忠興の命をうけて、重臣沢村大学助吉重が、事情の聴取をした。

その結果、永高は永高に預けられ、一族の者は日田に戻るように命じられた。しかし彼らは、小倉の近辺に詰めて、様子をうかがっていた。

八月になって、永高は帰国を許された。

かの捕えた下人も、永高に渡される、とのことだったが、日田の代官小川又左衛門が、御礼の使者を差し向けたところ、罪人は永高に渡すのであって、小川代官に渡すのではない。要らざる礼、とあって、下げ渡しは沙汰止みとなった。

財津一同は、情理ともに兼ね備えた細川の仕法に感じ

入って、連書して、向後、細川家への忠誠を誓った。

永高兄弟は細川家に仕官しようとしたが、天領のこととて自儘にならない。そこで、末弟が関東で僧になっていたのを呼び戻し、還俗させて、善内兵衛永将と名乗って、細川家に仕えさせた。のち二〇〇石を賜わったという。

永高も、長く忠興の恩義を忘れず、かつて豊前からの逃亡者が日田に入った際、依頼によってこれを捕え、小倉に送った、とのことである。

また寛永九年には、自ら願って細川に仕え、藩の転封に従って熊本に移った。

五 威勢の余光

寛永元年（一六二四）領主石川主殿頭忠総は、大原八幡宮を、求米里から現在の田島の社地に奉遷し、おおいに祭礼を興した。

この頃の日、財津統周が供を引き具して、他行していた。

たまたま行き会った石川の老臣某は、一行の物ものし

さに驚いて、思わず傍に寄って、道を譲ってしまった。

通り過ぎてから、振り返って、今のは何者だ、と質すと、財津弥太郎、とのこと。

怒って、無礼者め、たかが浪士の分際で——と、聞こえよがしに怒鳴ると、これを耳にした統周の方も、おおいに怒って、道を引き返し、あわや大珍事に及ぼう、という事態になった。

狼狽したのは、石川の家来たち。急いで双方をなだめ、怒りを静めたので、やっと事なきを得た。

この事を知った石川忠総は、老臣某を叱責して、財津には慰撫を申し送った、という。

この顛末を記したあと、『日田記』の筆者は、こう云っている。

大友氏の没落後は、諸城主は流浪の境涯となったが、財津一門だけは、決して家の名声を落さないよう、努めて来た。だから石川氏の方でも、その処遇が厚かったのだらう——と。

考えられない事実ではない。

しかし、石川の厚遇の理由を、これだけとてしまふのは、いささか身^{ひいき}鼻^{びな}にすぎるだらう。

六 日田を出た財津氏

財津大学助永高は、財津鑑氷から孫にあたる。天正一二年（一五八四）父を継いで城尾城主となった。

豊臣秀吉の朝鮮出兵に、大友義統に従って出陣したが、義統が太閤の怒りに触れて、大友家を取り潰しに遭ったので、永高は筑後柳川の城主立花宗茂の許に身を寄せた。

そののち、筑前上座郡に引きこもっていた慶長八年（一六〇三）、豊前小倉藩細川忠興の家臣米田監物の推荐によって、忠興に三百石を以て召し抱えられた。そして宇佐郡山本村に居を定めた。財津一族が細川家に仕えた最初である。

慶長一八年（一六一三）、彦山において同族の財津永広らと細川藩との紛争に、調停の労を執ったことは、前に述べた。

寛永四年（一六二七）のころ、永高の許に弟永正、永潔をはじめ財津氏の八名が寄食していた。ある時藩主細川忠利が宇佐に狩獵に出、永高は八名の者を引き連れて謁した。

八名はすぐに召し出され、細川の転封とともに熊本にも移ったが、以後も日田から肥後へ出る一族が相継いで、彼らは永高の家を本家として肥後財津氏に結束した。

一方、時期は少し下がるが北の津軽にも、財津の名を挙げた男がいた。財津久右衛門永治である。

永治は弥太郎統周の孫である。

津軽藩主津軽信政は、天和二年（一六八二）三月、幕府から越後高田の荏羽、三嶋両郡の検地を命ぜられた。この時永治は江戸にあつたらしいが、検地の腕を買われて召し出され、これに加わった。この検地は三カ月をかけて完了した。

翌年の七月、永治は幕府から褒賞として白銀一〇枚と時服二領を賜わり、八月には禄高二〇〇石であらためて津軽藩に新規お抱えとなって、御用人を命じられた。

その後も永治は江戸在勤を続けていたが、元禄八年（一六九五）津軽の大凶荒に際し、翌年から領国へ下って、三年にわたって藩内を視察、農事を指導して復興に尽くした。この功により三〇〇石に加増され、昇進して大目付に到った。

このほかにも農具の改良や毛見の改善などの業績を挙げ、元禄一二年五月（一六九九）弘前に没したと伝えられる。

その子作之進永宗は、のち藩を辞して津軽を離れた。

財津永治と用松姓の祖

本文前ページに、津輕播に仕えて農政家として活躍した郷土の先達、財津永治の事績が述べられている。永治の生国については、津輕では九州の浪人というだけで、素性は不明だったという。

それが先年、永治の業績に詳しい弘前大学・羽賀与七郎教授と、同大学に学んでいた日田出身の学生（財津姓）との奇縁から、永治の出身地が明らかにになり、その功績が郷土でも知られることになった。

『財津家譜』によると、永治の父、財津永完は、与七郎・与兵衛と称し、用松（清水町）に住み、のちに小七良入道と改めている。用松に住んだため、のちに用松氏を称したとあり、この財津小七良入道が用松氏の祖といふべき人であろう。

参考資料（『天領日田第五号』『九州の浪人・財津久右衛門

永治』熊谷武雄）

第四節 近世、天領の時代

一 庄屋の始め

日田の領主となった石川忠総が、股広ここうと頼む老臣をしりぞけてまで、財津氏のみならず、旧士豪の地侍を立てようとしたのは、何故か。

相手に敬意を払ったのでもなければ、ましてや、恐れただけでもない。

徳川政権は、国の基本政策として、農本主義をとった。だから建前は、農を士に次ぐ地位に置きながら、その実質は、収奪みちの途を抜け目なく整備してあった。

名代官といわれる役人があって、その恩情が讃えられ、としても、厳しい収奪が前提にあつての、緩和だった。

その方法の一つが、村役人制度である

村役人の最も基本的なものは、庄屋である。徳川幕府は、その始めから、村には庄屋を置いた。この名称は、江戸時代最後まで、変わっていない。

庄屋に期待されている、最も重要な職務は、村落共同体の長として、村内の紛争や事故の解決であり、村を代表して収納に、責任を持つことである。

庄屋は、お上から任命された。始めは、その土地の士豪の、統領ではなくとも、一族の中の有力な人物が、任ぜられた。

彼らは、彦山事件に見た、田川の総庄屋弓削田のように、事があれば実力に訴えるだけの、強大な力を持っていた。

その土地を平穩に維持していくためには、そういう士豪庄屋衆の存在が、絶対に必要である。

しかし、それが強大になりすぎては、統治者自身の存在が、脅かされる。

そういう連中が、日田のあちこちに、ごろごろしている。

外部から来た領主や代官としては、彼らの機嫌をとりながら、事なく職務を果たしてくれるのを期待するわけだ。

士豪庄屋衆の方は、ある程度の権限を与えられて、村の中での特権が誇示できる。軽微な紛争の裁判、庄屋山

の所有、年貢のかからない手作田、などの権利が、主要なものである。

貞享二年（一六八五）から、三花を含む小野筋の村むらは、天草代官支配地に入れられるがそのうち、今井代官の時に、庄屋に対して役料が支給されるようになる。

たとえば、年貢の基準となる村高に対する庄屋役料は、大きい用松村では五六二石について約六石、小さい秋原村では九七石について二石半である。

これだけが、庄屋の取分として、年貢の中から除外される。一般の百姓とくらべて、優遇されている、というべきであるが、そこにはやはり、権力組織の末端としての期待が、幕府側にあったのである。

後に、組頭、惣百姓、百姓代などの職制が設けられて、庄屋とともに、村役人として行政の一翼を担うことになる。

村の世話役

三花ではむかしの村ごとに、役職などの名前で呼ばれる家があった。

江戸時代には村を代表する庄屋が領主から任命され、その下に組頭、百姓代（または総百姓）が置かれて、これらを村役人と云った。

庄屋はもちろん村の長で、民情を把握して行政的な事務を行う反面、領主に対しては年貢の収納、命令の執行等の責任を負った。

組頭は数名あって、庄屋を補佐して読み書き計算などの実務を受け持った。

百姓代は一般の村民と庄屋との仲介役として、公文書などに連署した。

江戸以前の呼び名であまり聞き馴れないが、今に残るものに次のような名がある。

センドウ 「先道」とも書くが、「専当」が正しい。

中世に寺や荘園に置かれた事務担当の役。今はその集落の草分けのような立場にある家が、通称としてこう呼ばれることが多い。

ジツチヨウ、ゴチヨウ 「十長」（什長とも）「五長」（伍

長とも）と書く。十軒あるいは五軒程度の家をまとめる役だったのだろう。江戸期の五人組頭（前記村役人の組頭とは異なる）に類する。

なお、ほかに

オーザ という名がある。これは村役と違って、浄土真宗門徒で講師を招いて説教講座を開くことを認められた家、を云う。「大座」ではなく「御座」が本来の呼び方である。

二 庄屋と村民―藤山村騒動

村民と代官との間に立って、板挟みになりながら、どちらの側に、より傾くかによって、庄屋の顔つきは違って見える。

意図的にそうしたことなくとも、その置かれた微妙な立場から、少しの揺れを受けてさえも、どこへ転んでゆくのか、わからないことも多かった。

元禄四年（一六九二）九月、藤山村の農民一名が、時の天草の今井代官へ、庄屋の罷免を訴えて出た。

藤山村の庄屋職は、江戸時代の初め頃には、売買いができた。このときの庄屋は源左衛門になっていた。

訴状の内容は一五個条にわたっていて、主なものは、村民の田畑、山野などを不当に横領した。

信仰に関して、扱いがよくない。

川を独占して、しかも毒を流している。

大酒を飲み、酔興をする。

村民を勝手に使役した。

などである。

これに対して、庄屋は返答書を差し出して、いちいち反論している。

今井代官は、天草富岡の陣屋に、双方を呼び出して対決させようとしたが、小野筋、大肥筋の庄屋らの仲介によって、和解した。

その条件は、農民の側に有利な決定であった。

村落共同体の内部にあっての、この対立抗争は、農民層の自意識の向上によって、基本政策である農本主義体制の一画が、綻びはじめて来たことを示している。もちろん、その破綻は、都市経済の拡大などもあって、理由は単純ではないけれども――。

しかもその破綻は、収奪方法のいつそうの厳しさを招き、農民は貧窮を加えることになる。

三 庄屋と農民―穴井義民の直訴

村という運命共同体の中で、農民の側に立って行動した庄屋は数多くあるが、その典型的なひとりとして挙げられるのが、かの馬原村庄屋穴井六郎右衛門である。

六郎右衛門の行状は、あまりに名高いし、直接に三花の歴史と関係があるわけではないので、述べないが、かねてからの、荒地の開墾や、切添え、溜池・水路の造成



竜川寺の馬原供養塔

など、農民の一人として、云わば篤農家的な資質の面が、あったと思われる。

古稀の年齢を越えて、なお行動に出ようとする気概と、この農民的資質が、権力に対しても、止むに止まれぬ気持ちで、掻き立てたのだらう。

延享三年（一七四六）も師走の二八日の夕べ、寒風の吹きすさぶ中、もう真つ暗な浄明寺川原の刑場で、六郎右衛門と次男の要助、飯田惣次の三人は、斬罪に処せられた。

竜川寺の水誉竜作和尚は、前まえ、助命を嘆願していたが、既に処刑の報をうけて、ひそかに刑場に赴いて、三人の首級を持ち帰った。

そして寺内に埋葬して、小さな自然石を以て墓標とした。

この件について埋葬、法要などがお構いなしになつてからのち、三人の七回忌に、あらためて供養塔を建て、法要を営んだ。

この馬原供養塔は、竜川寺に現存しているが、公をはばかって、六郎左衛門、用助、惣次郎と、少しずつ名を変えている。

この事件に関する幕府の一連の申し渡しの中で、藤山村の庄屋忠左衛門は、渡里村庄屋などともに、白銀五枚を賜わっている。

四 広瀬淡窓と三花

近世、とくにその後半の、日田の歴史を語る上で、大きな光芒を放っている、ひとりの人物に、触れないわけにはいかない。

もちろん、広瀬淡窓である。

ここでも、淡窓の三花とのつながりを、少しだが、述べておこうと思う。

日田の広瀬家は、延宝元年（一六七三）に初代五左衛門が、筑前から来て、現在の地に居住したのに始まる。

五左衛門は、用松の尾形家から妻を迎え、晩年に至って、家を長男に譲って、自分は末子藤左衛門を連れて、用松に退隠した。

その家は、代々用松村の庄屋を勤めている。

豆田の本家は、淡窓の父三郎右衛門に至って、五代となる。

淡窓の自伝である『懐旧棲筆記』には

余幼少ヨリ。遊戲セシ地ヲ挙ケテ云ヘハ。先ツ大原山ハ幡宮ナリ。……又羽野妙見ノ祠ニモ通夜セシコトアリ。羽野ノ昆比羅ニモ登リシコトアリ。

とあり、また

文政七年七月二十一日 伸平、伊三郎、謙吉ト羽野金毘羅ノ祠ニ謁ス。……五更ニ家ヲ出ツ。山ニ至リテ。始テ曙ケタリ。山上ヨリ霧ノ起ルヲ觀ル。岩巒草木ヨリシテ。遠近田畝村落。其際ニ隱見出沒スル者。千態万狀。詩画ノ写スコト能ハサル所ナリ。平地ヨリ觀ルトハ。大二觀ヲ異ニセリ。是レ俗ニ日田ノ底霧ト称スル者ニテ。他方ニハ稀レナル所ナリ。

（四三歳）

当時、旅の送迎の宴をする風習があつたが、淡窓も文政十一年（一八二八）四月に、宇佐へ旅行した帰り、迎えの人びとと、菅相寺で弁当を開き、歓談して、帰宅し

ている。

大坂で塾を開いていた、淡窓の弟旭莊も、帰省の往復に、たびたび菅相寺を利用している。

嘉永三年（一八五〇）市ノ瀬と伏木を結ぶ石坂が、隈町の山田常良によって、改修された。

豊前四日市には、日田代官支配下の陣屋があり、中津には天領租米を納める日田蔵が、あった。中津・宇佐へ到る道路は、重要な街道だった。

淡窓は、市ノ瀬村庄屋梶原景履の依頼に応じて、改修記念の文を創っている。



淡窓像

いま、石坂の中途に、森昌明の書によって建てられている、「石坂修治碑」がこれである。

五 幕末動乱期の三花

西国筋郡代窪田治部右衛門鎮勝が、日田に入ったのは、元治元年（一八六四）三月八日。一〇日に陣屋に着陣した。

騒然たる西国の状況に、対応すべく、窪田は選ばれて、郡代に就任したのだった。

慶応二年（一八六六）六月七日、第二次長州征伐の戦闘が、開始された。

窪田は小倉へ出陣して、支配下の郡村へ、軍役人夫を出すように命じた。

また庄屋たちにも、交替で小倉へ出役するよう指令した。

約一ヶ月の間に、延三五二名の人夫と、食糧、松明、弾薬函等が送り出された。

幕府軍は敗退を続け、八月一日、小倉落城、窪田も帰陣。その後を追うように、小倉の負傷者、落武者が、続々と日田へ入って来た。

これらの往来は、羽野原、用松原、山田原を通っていつ

た。眺めている人々の、戦々恐々たる心情が、よくわかる。

九月、農兵隊の募集が開始された。一二月までには編制を終って、制勝組と名づけられた。豆田町年寄中村平太夫が、頭取取締に任ぜられ、要所の警備に当たった。

豪家からの拠出金も命ぜられて、羽野村庄屋横尾忠右衛門は、一〇両を、翌年にはまた二〇両をと、差し出している。

慶応三年（一八六七）四月二一、二二の両日、郡代の主導で、伏木の更原で、制勝組の大訓練が行われた。

中央の高地にあった古松に、幔幕を張って、本陣とした。生憎の雨だったが、窪田郡代は馬上、訓練を査察し、夜は本陣を中心にして、農兵とともに、野営もした。中村も馬で指揮をとった。

郡代はまた、村むらに触れて、庄屋たちに訓練を見学するように命じた。半ば郡代の御気嫌伺いで、彼らは登って来た。

近辺の者は、狩り出されて、人びとの接待、雑役などに奔走した。町から弁当持ちで、見物にやって来たものも、あったという。



窪田郡代の大訓練が行われた更原

時ならぬ号令や掛声、砲声、銃声などが、山やまに響いて、耳を驚かせたことだろう。

この本陣の古松は、殿様松と称ばれて、土地の人に親しまれていたが、後に落雷で枯れてしまった、という。

八月九日未明、さらに窪田は制勝組を率いて、山田

原で、大砲の実弾射撃訓練をした。

慶応四年（明治元年）正月、窪田郡代は高瀬地陣原（陣ヶ原）に城塞を築き、郡内の重立った者はすべてここに移動して、最後の一戦を挑むべく構えた。

一四日夜、宇佐の四日市陣屋が佐田秀らに襲撃されて、

炎上。山国から攻めよせて来る、との噂が立って、日田の町は騒然となった。

窪田は羽野金比羅山と城内鷹城山に、大砲を据えて、防備を固めた。

しかし情勢を説く者があって、ついに実戦に及ぶことなく、窪田郡代は日田を退去した。日田の町は表面無疵で、明治維新を迎えた。

四日市陣屋の襲撃は、御許山事件の先触れという、単発的なものだったが、もし、ほんとうに長州軍でも日田に攻め入って来たのだったら、その道筋にあたる三花は、どんなに惨澹たる状況に、なっていただろうか。

第五節 近代を迎えて

一 県の官員様に

年号は慶応から明治と改元した。

明治元年（一八六八）四月二五日、日田県が設置され、薩摩藩士松方正義が、県知事に任命されて、六月一日に着任。

明治二年正月に、政府に報告された官員名簿に、一八名の職員の中に

一、会計方 元豊後国日田郡

用松村庄屋

広瀬勝造

但月給拾五兩宛相渡候事

とある。

これが、明治四年（一八七二）の日田県官員録には、職

員五三名に増えた中に

権少属 豊後国日田郡用松村郷兵

源 高 康

任己巳九月十三日 広瀬 勝造

史 生 豊後国日田郡用松村郷兵

源 元 実

任己巳九月十三日 高取 文吾

とあつて、ほかにも

栗林村郷兵 源 永秘（日出 準一）

豆田町 藤原 重高（大内新兵衛）

とあるのは、苗字から見ても、三花にも何らかの関係ある人物かもしれない。

ところが、その年の十一月には、日田県は大分県に合併されて、消えてしまう。

明治五年には、年寄、庄屋などの村役人の名称も、なくなる。

明治八年（一八七五）の大分県官員録では

小属 ライタ 高取 成章

と見え、十二等出仕、月給二五円である。

前記の日出準一も、財津準一として、同じく小属で挙がつている。

役人ばかりが偉いのではない、とは、今だから云えることで、当時では官員様は、憧れの的である。

何もかもが新しく、おれが世の中を創っていつているのだという、自負を持って、若い役人は事に当たったのだろう。

そういう中に、ほかの多くの日田人とともに、三花人も頑張っているのだ。

二 騒擾事件と三花——神宮寺事件

明治元年三月一日、郡代窪田鎮勝が去つてのちの、混乱がまだ続いている頃、大原神宮寺で、願成就のあやつり操人形芝居が行われ、見物が集まった。

ところが、数十人の男たちが飛び出して、舞台は打ち壊す、半鐘は打つ、見物は追い散らす、という騒ぎになつ

た。

八幡宮神官からの知らせて、駆けつけた森・竹田の両藩兵が、空砲を放って、取り鎮め、聞きただしたところ、五馬筋の農民で、こんなに皆が困窮している時期に、楽しみ事とは穏当でない、と思つての仕業、とわかつた。

そこで事なく神事を勤めたが、抜身の槍や鉄砲に囲まれての、まことに異様な光景だった。

ところが、これがきっかけとなつて、翌一六日には、竹田河原に、馬原、求来里、上・下井手などから、五、六百人も集まつて来て、騒いだ。
一七日になると、

今日ハ郡中村々残ラズ、小野筋ハ羽野金比羅、友田二串迫ハ若宮、大肥ハ志賀社、或ハ高瀬ハ元大原杯と相集よし、如何ノ大変ニ相成候ヤ、誠二人氣立候事也

という次第で、小野、三花からも羽野（千倉）の金毘羅社に群集して、大いに氣勢を揚げた。

一八日は雨になった。

日田駐留の森・竹田両藩から、願があれば聞き届けるから、皆引き取つて、穏やかに願い出るように、との言渡して、一同解散。やつと事は収まつた。
明治初年の、不安な人心は、わずかなきつかけがあれば、たちまち爆発して、広がって行くのである。



千倉金毘羅社の鳥居

三 騒擾事件と三花——竹槍騒動

明治三年（一八七〇）一月一七日、日田県役所に、通報が入った。

各所見廻りの郷兵が、五馬市金凝神社へ到ったところ、村民たちが集まって、何やら相談している。様子が穏やかでないので、訊問したが、かえって追い返された。衆寡敵せず、止むを得ず立ち戻って、注進に及んだ、というわけだ。

県ではさっそく、史生高取成章に、郷兵一八名を率いて急行させた。

行ってみると、集まりは既に二〇〇名ほどになっていた。

高取は、直ちに解散するよう、いろいろと説得したが、いっこうに聞き入れない。

それどころか、ますます人数は増え、高取たちを取り囲んで、悪口雑言。

ついに高取は、目に立つ者二、三名を召捕るよう命令すると、衆徒も激昂して、乱暴しようとする。

たまりかねた郷兵のひとり、抜刀して衆徒に切りつけたことから、衆徒も怒って、襲いかかって来た。

郷兵がひとり生捕りとなり、高取自身も疵を負う始末で、危ないところを逃れ出て、帰県した。

こうして衆徒は、鉦や鉞、鎌、竹槍などを手に手に、進んで行つた。

途中、人数を加えながら、庄屋などの豪家、郷兵の家、日頃から恨まれている家などを打ち壊し打ち壊し、日田を目ざして押し寄せた。

一八日は、津江からも繰り出して、大山筋を打ち壊し、一九日には、竹田、庄手から、豆田に迫る勢いとなった。

こうして騒ぎはいよいよ大きくなり、ほとんど日田郡全体に及んでいった。

日田県は郷兵を派遣して、鎮庄に当たったが、隊長の長信成は三本松で、高橋敬一は豆田長福寺門前近くで、ともに暴徒のために打ち殺された。

暴徒たちは、その数七千とも一万ともいわれ、昼間は処々方々へ押しかけては、打ち壊しや強奪をし、夜は竹田河原にたむろし、奪って来た、炭を焚き、食糧を詰めこんでは、騒ぎ立てた。

残ル庄屋、両高瀬、小畑、川下、内河野、堂尾、関、河内、秋原、伏木、財津、草野氏、城内、小迫。余ハ残ラズ崩ス。

また

打崩サル庄屋宅

……上井手、求来里、竹田、田嶋、陣屋廻、庄手、渡里、友田、上野、寺内、石井、祝原、中嶋、鶴河内、小竹、藤山、用松……
井上善八、横尾忠右衛門……用松寺……兵隊二
出仕之宅残ラズ崩し候事

という有様。

用松の庄屋は、日田県小属広瀬勝造、用松寺は史生高取成章の所縁照妙寺であろう。横尾忠右衛門は羽野の庄屋である。

この騒動は、周辺の諸藩からの出兵で、二一日に、ほぼ平静を取り戻した。

中心となった者五名は、捕えられて、明治四年二



羽野の庄屋、横尾邸

月二七日、処刑された。ほかに罪科に処せられたものの、多数に上った。

事件は、日田、玖珠では収まったが、他にも大きな影響を与え、一揆は各地に拡がって、明治政府を悩ますことになる。

御一新の名はあっても、庶民にとっては何一つ有利となることはなく、かえって地租の改定など、不利な面も生じている。不満が引き起こした暴発だった。

計画的、組織的では全くないところに、止むに止まれぬ庶民の心情が、汲み取れて、哀れである。

四 騷擾事件と三花——竹橋事件

前の二件と違って、これは日田で起こった事件ではない。

明治十一年（一八七六）八月二三日夜、東京竹橋にあった、陸軍近衛砲兵大隊の兵営を出て、一門の山砲を曳いて、皇居半蔵門へ向かう、二〇〇名余りの兵士の一隊があった。

彼らは、皇居に入って、天皇に、自分たちの要求を訴えよう、としていたのである。

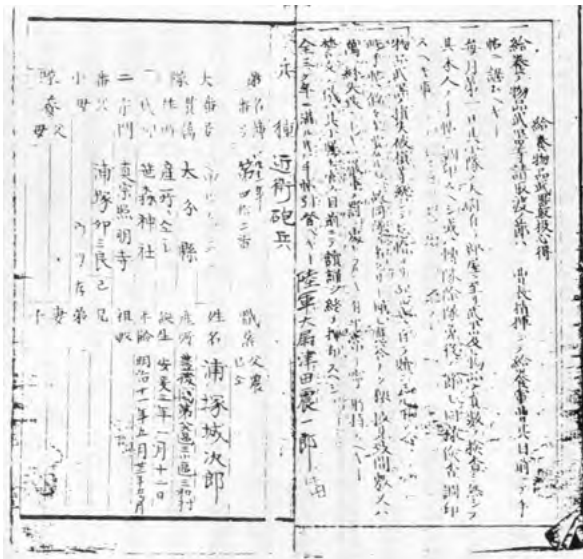
これが、陸軍の掟第四条

徒党ハ古来の嚴禁なり之を犯す者ハ重科申付候事

に違反する行為であることは、重々承知していた。しかし敢えて暴発したのである。

彼らの行動計画がいつ頃から始められたか、はつきりしないようだが、少なくとも何人かの兵士が中心となつて動いていった。ひそかに同志と語らい、豊後国日田郡三和村用松出身の、浦塚城次郎、二二歳（満年齢）も、その中であつた。

城次郎は、明治九年（一八七六）四月、熊本鎮台砲兵隊に入営。九年、一〇年の熊本神風連の乱、西南戦争と従軍して、この五月に近衛砲兵隊に編入されたばかりだった。



浦塚城次郎の軍隊手帳

実は、つい先程、決起のせまった、残暑のまだきつい

夜の八時半に、誘われて、行動に加わったのである。

ところが、その動きは、既に早くから上層部に知られていた。

彼らは制止する上官数名を殺傷し、営舎に火をつけて、兵営を出て来たのだった。

そして、皇居前に至ったとき、彼らの前に銃がつきつけられ、全員捕縛された。二四日午前一時半だった。

陸軍檻倉に収監された兵士たちは、陸軍裁判所に於ける、一方的な糾問の後、処罰が言い渡された。

近衛砲兵大隊第二小队砲卒

浦塚 城次郎

其方儀同隊兵卒小島萬助、長島竹四郎等徒党ノ企ニ興シ、去ル八月二十三日夜暴動ニ及フ科ニ依リ、死

刑申付ル

明治十一年十月十五日

同日夜、城次郎らは、深川越中島の練兵場で暴雨の中、銃殺刑に処せられた。豆田の人久保田善作の名も、見ら

れる。

墓は、青山墓地に「旧近衛鎮台砲兵之墓」と記されている。明治二二年の大赦によって、やっと建てることを許されたものである。

兵士たちは、命を捨てて戦った、西南戦争ののちも、一向に待遇が改善されず、かえって日給や支給品が減らされたことに、不満を感じていた。そして、除隊後の生活に、何の保証もないことに、不安を抱いていた。

竹橋事件の真相は、いまだ解明されていないところが多いが、彼らは、徴兵制度の矛盾を、天皇へ強訴することによって、解決しようとしたのだったといわれる。

結果は、むしろ彼らの意図とは、逆の方向に、事態が進んだ。

明治一五年（一八八二）いわゆる軍人勅諭が發布されて、徴兵の義務が強調され、兵士、いや国民に対する締めつけは、より厳しいものとなっていった。軍隊は、有無を云わせぬ、非人間的な集団となった。

挙句の果てに、日本は、いくつもの対外戦争に、踏みこんでいった。

暗い青春が、若い人たちを待っていた。

浦塚城次郎の靈は、何を思っているだろうか。
もう、歴史は、一人ひとりの思惑を越えて、国家的、
国際的な動きに、個人を巻きこんで行くことになる。

第六節 戦争の嵐の中で

明治以来日本は息を継ぐ間もなく、戦争を戦い続けて
来た。明治二七年から昭和二〇年まで、どの世代も、外
国を相手に戦った経験のない者はなかった。

とくに昭和一二年以降の長期化した戦争の中で、国民
一般はどんなに苦しみ、泣いたことだろう。

平和であることは尊いことだ。しかし平和を享樂して、
戦争の痛みまで風化させてもよいのだろうか。

一 国民皆兵

明治六年一月、徴兵令の公布。国民皆兵である。

男である限りひとり残らず、満二十歳に達したら徴兵

検査を受けなければならない。検査官の将校に、真っ裸、
の背中をバンと叩かれて「甲種合格」と云われたら、殆
んど間違いない兵役（へいえき）につかなければならない。そう、役
なのだ。

そればかりか、乙種であろうと丙種であろうと、すべ
て合格。身体の障害などで実際の軍務免除はあっても、
不合格ということはない。

徴兵検査の結果、入隊して、現役を終えると予備役に
入る。ここまでが常備兵役とよばれる。戦時の要員にあ
てるために、軍隊に召集して教育訓練を課した者を、補
充兵役という。常備兵役と補充兵役が第一国民兵役であ
る。予備役を終えた者は後備役である。第一国民兵役以
外の一七歳から四五歳までの男子はすべて第二国民兵役
である。国民全員が国家の兵士ということになっている
のだ。

明治四三年、軍は在郷軍人会を設立して、男子なら、
軍隊経験の有無を問わず、組織することにした。そして
これを通して全国民を掌握していった。

在郷軍人会では、毎年簡閲点呼が行われた。三分分会
では、岡本の下流の馬場どん淵にあった、幼駒育成場に

集合して、簡単な訓練をした。退役軍人の村分会長が大
声で号令をかけ、叱咤した。

戦争が勝利を収めている間は、軍人が幅をきかせ、在
郷軍人会の勢いも盛んだった。

しかし戦況が苛烈になっていった末期には、壮丁はほ
んど出征し、(旧制)中学生、女学生も工場に動員され
て、残ったのは高齢者と女性と子どもばかり、という状
態になってしまった。

二 戦場へ

戦争になると、現役の兵士だけでは不足するので、当
然増やすために社会人を召集する。

召集には、急いで欠員を補充するための充員召集と、
単に人員補充のための臨時召集とがあった。

召集令状は赤い紙に「何月何日何時に何なにへ集合せ
よ」と書いてあるので、「赤紙」とよばれた。兵士に向
かって

「お前たちは一銭五厘でいくらでも補充のきく消耗品
だ」

と暴言を吐いた上官があったそうだ。葉書一枚の通知で
簡単に引っぱって来られる、というわけである。これが
当時は暴言でも何でもない、ほんとうのことだった。

陸軍の司令部なり海軍の鎮守府なりの担当官が、名簿
から拾って、市町村に召集令状を送付する。役場の兵事
係は交付簿に記入し、急使を仕立てて当人の許へ走らせ
る。不在の場合は、本人に代わる責任者に確実に手渡し
して、半片を持って帰ることになっていた。

戦局が厳しくなると三日に一度くらいも役場へ令状が
届いたそうである。夜になって届いて、令状を送達する
と、役場へ帰って事務整理を終わるのが午前四時にも
なったという。

召集令状を受け取ると、かねて覚悟はしていてもやは
り動揺する。

臨時召集の場合は五、六日の余裕があるが、充員召集
は二、三日の時間しかない。

表向きお国のための榮譽と祝福されても、送る者に
とっても辛い別れである。

女たちは木綿の白い布を持って、近所や伝手^{つて}を求めて、
時には街頭に立って、女性をつかまえて千人針への一针

を頼んだ。千人の女性が無事生還の祈りをこめて、布に赤い糸を結び止めていった。

晴れの日となる。祖国に身命を捧げる時と、喜び勇んで出る者もあったろう。残して征く妻子肉親を案じての涙を隠す者もあったに違いない。

国民学校の校庭に村民、児童が集まって壮行会が催される。

村長、村の幹部の祝辞をうけ、筆太に「祝出征 ○○君」と書かれた幟旗を先頭におし立てて、村を後にする。千個の赤い糸玉が並んだ千人針はしっかり腹に巻いている。近親、近隣の人びと、在郷軍人会、エプロンに襟がけの国防婦人会、小学校の子ども、と続く。手に手に日の丸の小旗を打ち振り、軍歌を唄いながら、行列は日田駅へ向かう。



用松青年団の入営・入団壮行会

駅頭での萬歳に送られて、列車は日田を発って行った。この駅舎に生きて再び降り立つことができるかどうか――。

昭和一四年八月、ソ満国境のノモンハンの戦闘で、藤山町岡本の荒川寅五郎氏が戦死した。日露戦争後はじめての地区出身の戦死者だった。

無言の帰還を駅に出迎えた人々の眼に、夫人の胸に抱かれた遺骨箱を包む布の白さが、強い衝撃を与えた。三和校で村葬が盛大に営まれた。

三 戦いのかげで

戦争が日本に不利な状況を重ねて行くにしたがって、国民のくらしにも不便はおろか、苦しさ辛さが重くのしかかって来た。

食糧は不足する。三花地区は農村地帯だから、まだまだよかった。非農家ではすべての食べ物が配給制になった。米も一日僅か二合五勺の割当てすら満足に支給されず、高粱や豆粕で代用された。うどんやパン、団子汁といった粉食も、芋蔓などを刻みこんだ汁の中から、やっと箸の先に引っかかる程度だった。

学校の運動場も掘り返されて、芋や大豆、南瓜などが植えられた。人びとはいつも腹を空かせていた。

子どもは昔のように下駄ばきで通学した。

衣料も切符制になった。一人何点という持点で与えられた切符で、買わなければならなかった。それもいつてもというのではない。たまに割当てで店に並ぶのを、目の色を買って殺到するのだった。布地はスフと略された人造布。

女性にはモンペ履き。華やかな色あいの布地はいけない。それに子どもと同じく、綿を詰めた防空頭巾。男はいつも戦闘帽にゲートル。

日田は清岸寺町で敵機B 29が余った爆弾を落していったといわれるほか、これという爆撃はなかった。それでも上空高く機影を見ると、空襲警報が発令される。学校では校庭に、また家毎に防空壕をつくって入った。三花地区では、学校でも集落でも山の近いところの斜面に横穴を掘って、さあ空襲警報となると、その中に避難した。

町内では隣保班が集まって、バケツリレーや火叩きで防空訓練が行われた。

それどころか、青竹の先を斜めに削いで、これで敵を刺傷するという、竹槍訓練に、男も女も学校児童までが、エイエイと真剣に取り組んだ。いつかは神風が吹いて、皇国は戦争に勝つのだ、と誰もが信じていた。

昭和二〇年、戦局は本土決戦がいよいよ時間の問題となり、小倉陸軍工廠が日田に疎開をして来た。工場の施設といっしょに、一万数千人の軍人、技師、工員たちもどつと押し寄せ、民家に分宿した。

三花には工場設置こそなかったが、天神・清水・財津

各町あたりまで、各家庭軒並みに、数人ずつが割り当てられた。多いところでは独身工員が一〇名ほども寄宿し、家庭もちの技師などを泊める家もあった。

軍事工場が米たことで、もし戦争がもっと続いていたら、日田も爆弾に狙われていたかもしれない。

夜は、電灯に黒い布を覆って、灯火管制の暗く丸い光の中で、勉強し、繕い物をし、夜なべをした。

戦いが終わって、その布を外して、明るい光が家中を照らし出し、戸外まで溢れ出したとき、自由の光の第一閃が輝いたのだった。

しかし、庶民のくらしには戦後もまだまだいっそうの苦難が待っていた。